

# 保健室だより

平成27年度第19号 千葉県立千葉南高校保健室

## またテロが起きた…

パリの繁華街が恐怖のどん底に落とされた。ロシア機が爆弾により墜落させられた。日本人ジャーナリストの殺害事件も生々しく記憶にある中で、イスラム国による犯行が世界を震撼とさせた。

こうした過激派組織に関連したニュースが放映される時、アナウンサーだけでなく、専門家も登場して解説する場面が多く見受けられる。こうした専門家の中に、みんなの先輩がいる。

## 田中浩一郎さん

南高卒業後、東京外国語大学外国語学部ペルシャ語学科に入学し、大学院に進学後、外務省に入った。イラン日本大使館勤務の後に、中東関係の専門的なお仕事をずっとされてきた。

現在**日本エネルギー経済研究所、中東研究センターでセンター長**をされている。論文・著書・講演歴多数。

テレビで田中さんがお話された映像がネットでも見られる。田中さんの一部のコメントを要約すると…

「イスラム国による組織的なテロ活動に関わったとされるシリアのパスポートを持つ男は、難民に交じりギリシャで難民申請していた。テロなどの意図を持つ人が、難民申請者に紛れ込んでもおかしくない。人道的観点から言えば難民は受け入れるが、その際に背景をきちんとチェックすることが重要。一番大切なのは、シリアの内戦状態をいかに終結させるかということ。」

日本にいたって、いつ何が起きるかわからない時代に今私たちは生きている。テロによる身近な影響は、街中からゴミ箱が撤去されたこと、公共の交通機関内で不審物についてのアナウンスが流れるようになったこと、空港のボディチェックが厳しくなったこと、航空機内にペットボトルを持ちこめなくなったことなどがある。アメリカでは飛行機の乗り継ぎの際には靴まで脱がされた。でもまだこのくらいの影響などなんでもない。私たちと同じこの地球上で、同じ時を生きている人たちが、突然、大切な人の命を奪われ悲しみにくれていることを忘れてはならない。

田中さんは日本人ジャーナリスト殺害の時も、テレビでコメントを求められる場面がたくさんあった。目が充血してるなあと思った時もある。きっとあまり眠れてないんだろうと、お身体が心配になった。

**田中さんは南高6期生。**現在の同窓会長樫浦さんと同期。

政情が安定しない国に滞在し、身の安全も脅かされる可能性のある中で、必死に働いてこられた田中さん。もしお時間が許せば、自らの体験を南高でお話してもらえたらいいなと思っている。

## イスラム教徒の人たち

テロに対し、各地のイスラム教徒は過激派組織の犯行を非難している。髪を覆うスカーフ(一般的なものはヒジャブという)を着けて歩くと「イスラム教徒だ」とささやかれ、傷ついている人がいる。私は善良なイスラム教徒の人たちとボルネオで楽しくおしゃべりし、大学院ではヒジャブを着けて颯爽と自転車をこぐ留学生を素敵だなと感じていた。

若かりし頃、常識知らずの私はシンガポールのイスラム寺院にショートパンツで入ろうとして、寺院のお兄さんが血相を変えて私を止めに走ってきた。そして下半身に巻きつける布を貸してくれた。本当に申し訳なくて自分が恥ずかしかった。他国の文化の最低限のルールも知らずに行動するのは、その国に対する冒瀆でもある。

## 国境なき医師団からの報告～シリアより～

「出口の見えないこの内戦の一番の犠牲者は一般市民です。人々は戦争ではなく、生きるために闘わなくてはなりません。厳冬期、十分な暖房機器もなく、空爆や砲撃に怯えながら、乳幼児でさえ凍えるような寒さに耐えるしかないのです。」

「繰り返される爆撃にだんだん慣れてしまっています。しかしやりきれない光景にも直面します。男の子のものと見られる小さな手足が道に転がっていることを忘れられません。私たちはそういう光景をほぼ毎日、目のあたりにしているのです。」

こうした活動をしている人たちの仲間に入れてもらいたいと思ったこともある。けれど英語とフランス語が不自由なく使えるのが最低条件であきらめた。今はスズメの涙ほどの資金援助しか私にはできていない。自分の能力の無さががゆい。